

新建築

SHINKENCHIKU

7



大阪国際中学校高等学校

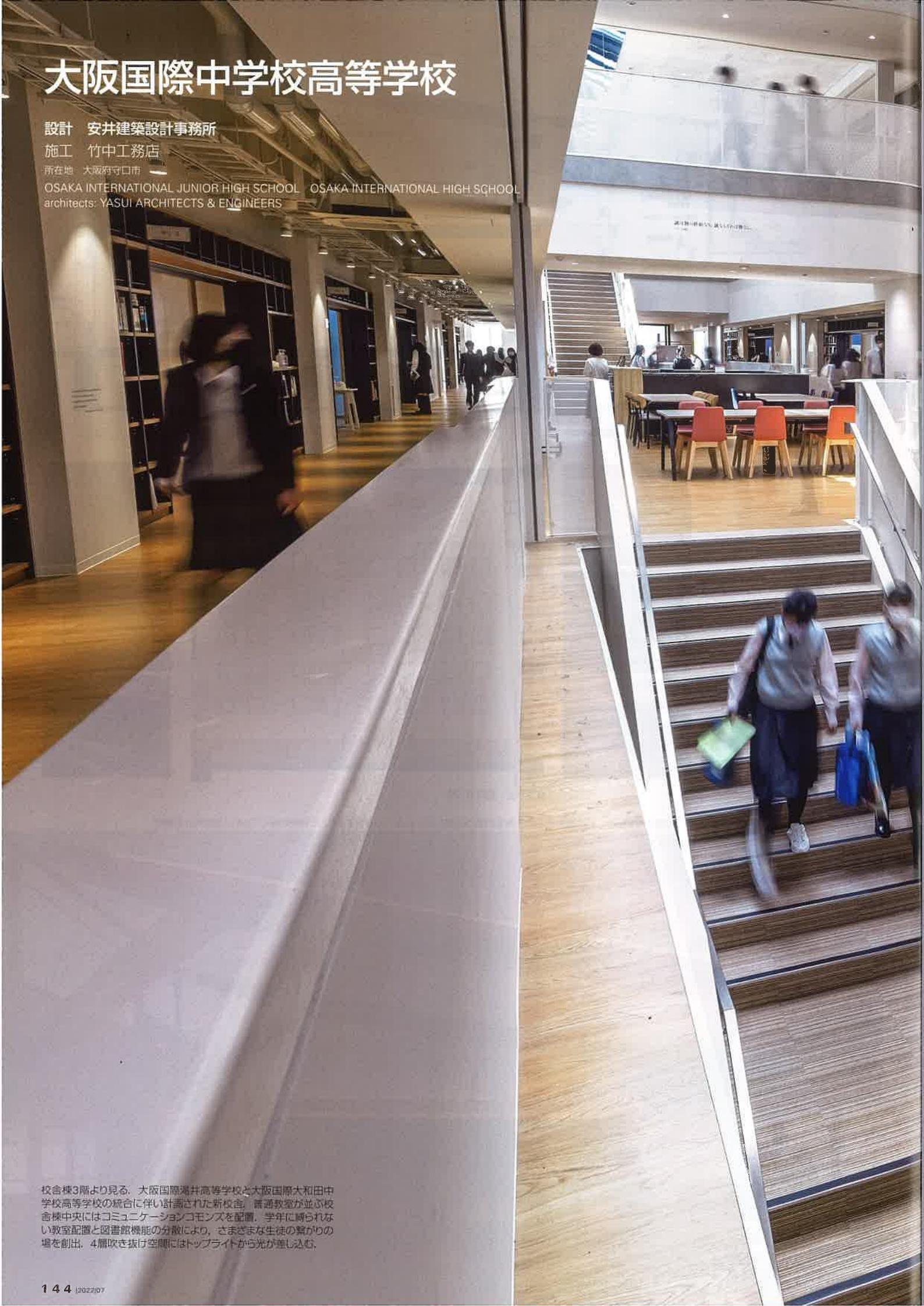
設計 安井建築設計事務所

施工 竹中工務店

所在地 大阪府守口市

OSAKA INTERNATIONAL JUNIOR HIGH SCHOOL OSAKA INTERNATIONAL HIGH SCHOOL

architects: YASUI ARCHITECTS & ENGINEERS



校舎棟3階より見る。大阪国際守口高等学校と大阪国際大和田中学校高等学校の統合に伴い計画された新校舎。普通教室が並ぶ校舎棟中央にはコミュニケーションコモンズを配置。学年に縛られない教室配置と図書館機能の分散により、さまざまな生徒の繋がりの場を創出。4層吹き抜け空間にはトップライトから光が差し込む。

ふれて 感じて 考える学びの場

「学びの場とはどうあるべきか」この問いは学校をつくる上での原点である。

この問いに対し、私たちは、生徒が人の考え方や文化・自然にたくさん「ふれる」機会をつくることで、感じて、考えて、自分らしさを磨いていける、そんな学びの場を目指した。

舞台は守口市に拠点を置く大阪国際学園のふたつの学校を統合した中学校高等学校である。

キャンパスはグラウンドを中心に、円弧状に校舎棟と特別教室棟、教科に関係するランドスケープでつくられ個性あるMANABI庭が散りばめられ、学びの連鎖を起こす配置計画としている。

接地性を高めるため分棟形式とし、外部に開いた特別教室棟はMANABI庭と繋げることで、内と外

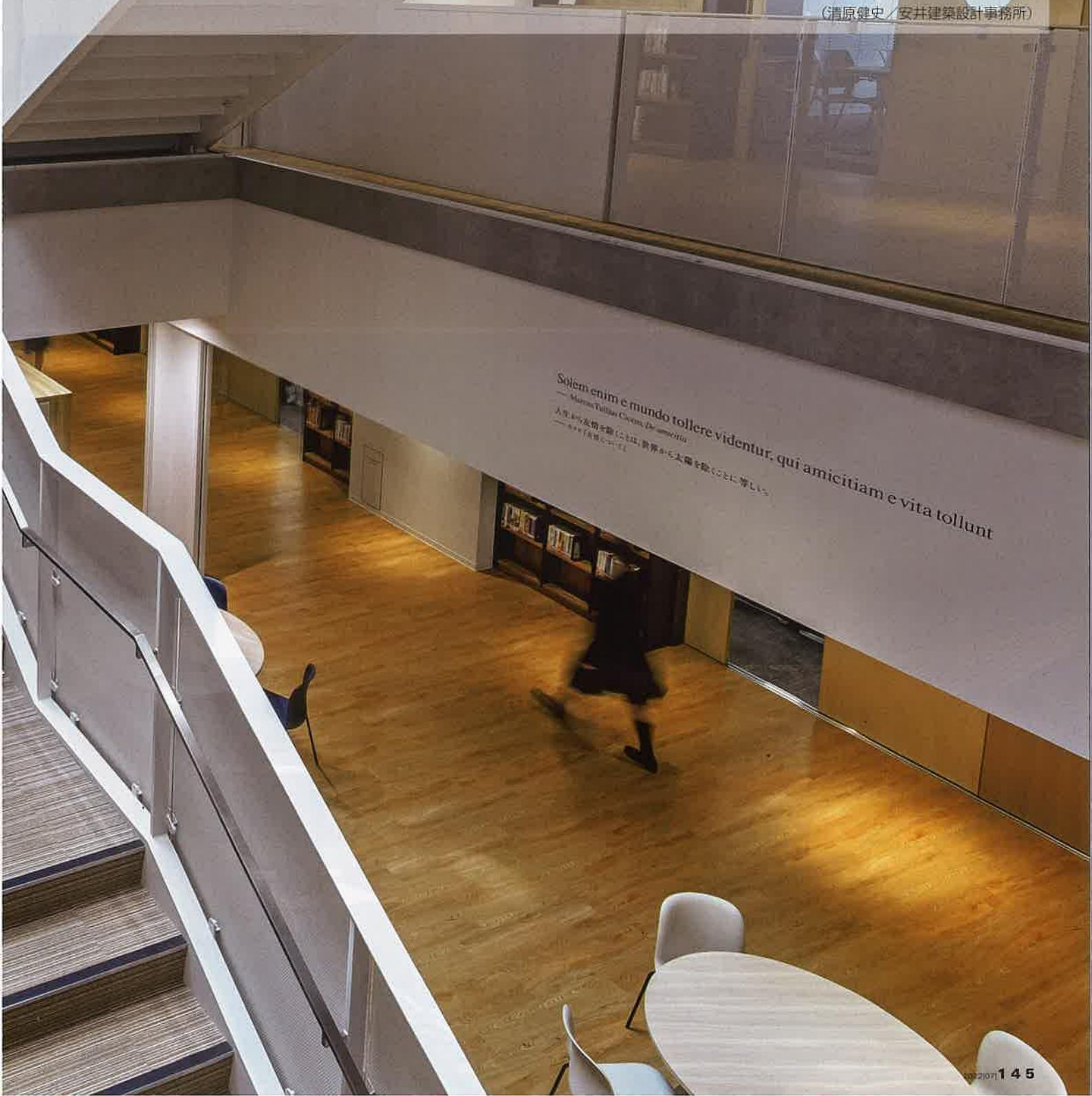
を使った授業を可能としている。これにより、教科書で見た水生生物をビオトープで観察する理科の授業や、日本庭園と和室を使った礼法の授業、菜園で収穫した野菜を使った調理実習の体感といった教科書での学びに留まらない記憶に残る教育空間が生まれている。また、木材利用では平屋の特別教室棟は木のトラス構造を現し、各棟で張り方を変えたスギ板の外壁とすることで、木の文化にふれることができる。その他、創エネ・省エネ化した理科教室棟では脱炭素化への取り組みや色分けした設備配管見える化し、建築を柱ひの要素に変えている。

一方で、生徒間の交流を高めるため内に開いた校舎棟は、4層のワンルーム空間コミュニケーション

コモンズを全学年の教室と繋げることで、年齢を超えた「教える」⇨「教わる」環境が相互作用し、生徒同士が触発し合う学びの場となっている。この場所は、教室とオープンに繋げることで、一体利用した授業を可能にしている。また、教室の扉を除く壁面には本棚を並べ、コモンズを本に包まれた空間とすることで、生徒が日常から書物の知識にふれる場となっている。本棚の側には生徒の心に問いかける偉人たちの一節を壁に記しており、生徒は本を探しながらコモンズを回遊し、人の教えや活動に出会える「知の交流拠点」となっている。

外に開く特別教室棟と内に開く校舎棟を持つこのキャンパスは、人の考え方や文化・自然にたくさん「ふれる」ことで、生徒を成長させる学び舎となっている。

(清原健史/安井建築設計事務所)



南、理科教室前渡り廊下より見る。特別教室棟は分棟にすることで、学びの場を教科に関連したランドスケープとともに授業に関連した計画した。



美術・技術教室棟と校舎棟のガーデンカフェを繋ぐ、MANABI庭(芝生の庭)。生徒の作品を展示する場と食事の場が重なる活動空間。







Nur wer an sich selbst glaubt, kann anderen treu sein.

— Erich Fromm, *Die Kunst des Liebens*

自分が信じておられるだけ、他人においてて誠実になれる。

— 阿川弘之「愛の心」



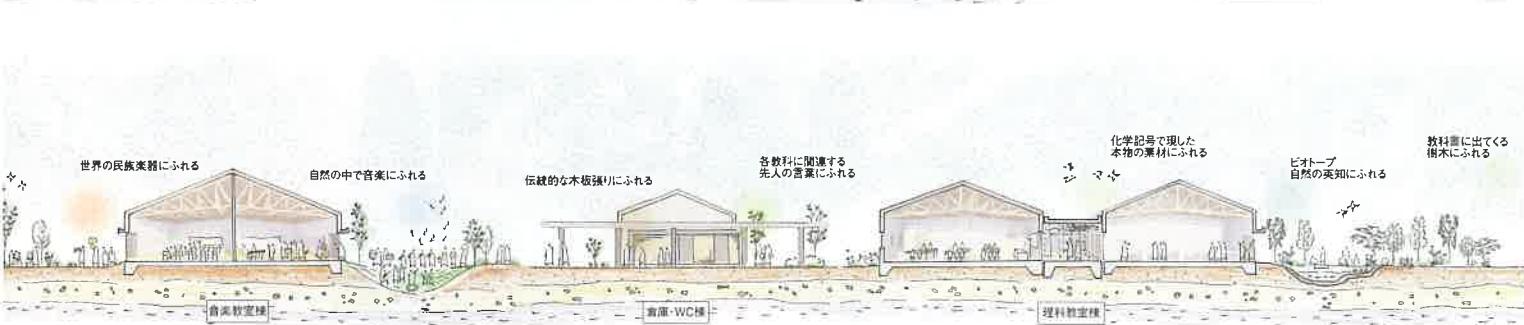
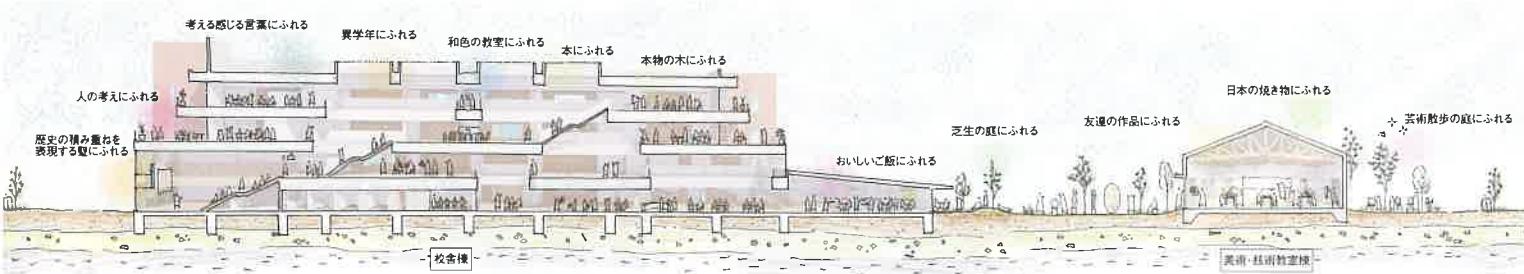
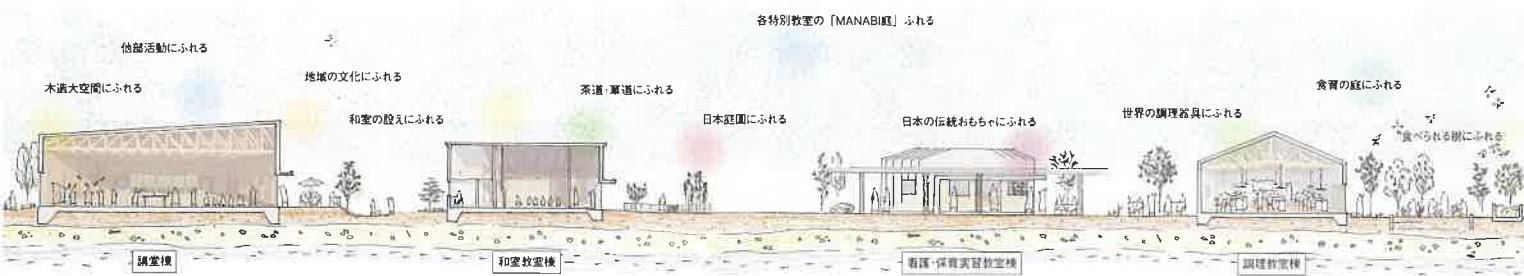
校舎棟2階コミュニケーションコモンズ。普通教室はコミュニケーションコモンズに面して配置。すべてに本棚を配置したコミュニケーションコモンズは、調べ学習の授業にも利用される。壁面には本の配架と関連した言葉が書かれている。



校舎棟エントランスホール。左の壁面は地域産の砂利を研ぎ、



美術技術教室。ショーウィンドウに日本全国の焼物を展示し、教材として利用。



断面スケッチ



教室棟・美術技術教室棟・音楽教室断面 縮尺1/200



和室教室前の日本庭園は茶道や礼法の学びの場となるMANABI庭(日本庭園)とした。



校舎棟ガーデンカフェ、グラウンドや芝生の庭に繋がる。

OMO7大阪 by 星野リゾート

設計 日本設計（基本構想・設計監理） 東環境・建築研究所（基本構想・内装） 岩田尚樹建築研究所（湯屋） オンサイト計画設計事務所（ランドスケープ）
施工 竹中工務店・南海辰村建設共同企業体
所在地 大阪府大阪市浪速区
OMO7 OSAKA BY HOSHINO RESORTS
architects: NIHON SEKKEI AZUMA ARCHITECT & ASSOCIATES NAOKI IWATA ARCHITECT & ASSOCIATES STUDIO ON SITE



南側外観。大阪市の新今宮駅に隣接する、客室数436部屋、14階建てのホテル。新今宮駅と同じレベルの2階には、島化広場「みやぐりひん」を計画。高層部には、LEDを用いた外装照りを使用した。

みやぐりんに建つあすまや。屋根は、厚さ9.0mmの銅板による三角形格子と膜による校正。柱位置はランドスケープや家具配置に合わせて調整している。



設計 基本構想・設計監理・構造・設備 日本設計

基本構想・内装・実環境・建築研究所

湯屋 岩田尚樹建築研究所

ランドスケープ オンサイト計画設計事務所

施工 竹中工務店・南海辰村建設共同企業体

敷地面積 13,907.34m²

建築面積 7,452.53m²

延床面積 37,283.18m²

階数 地上14階・塔屋2階

構造 鋼筋コンクリート造

一部 鉄骨鉄筋コンクリート造・鉄骨造(中間層免震)

BEI(省エネルギー性能指標) 0.60 (BEIm)

工期 2019年6月～2021年11月

撮影 新建美社写真部

(データシート192頁)

緑化広場「みやぐりん」全景。右に新今宮駅、中央は、芝生の谷として凹ませ、その周りにさまざまな居場所を配置した。



新今宮駅から見る南側全景。駅のプラットフォームと2階は同じレベルに位置する(GL +6,700mm)。



500歩圏内の都市を楽しむ

星野佳路(星野リゾート代表)



星野佳路氏.

——「OMO7大阪 by 星野リゾート」(以下、OMO7大阪)は星野リゾートが初めて大阪に進出したホテルです。こちらのエリアへの進出を決められた理由を教えていただけますか?

私たち星野リゾートは温泉旅館から始まり、リゾートホテルやスキー場などを運営してきました。しかし実は、観光客がいちばん集まるのは、都市です。外国人観光客は東京や大阪を目的地に来て、日本人も金沢や函館など、都市へ旅行します。都市に観光拠点を持つことは、私たちにとって大きなチャンスなのです。そこで10数年前から都市を拠点にしたホテルを計画し、「都市観光客をターゲットにすること」、「都市観光客のテンションが上がるサービスを提供すること」をコンセプトに、2018年に東京の大塚と北海道の旭川でOMOブランドをスタートさせました。OMO7大阪は、2017年に大阪市が開発事業者公募を行った土地に対して建設設計画を提案したのがきっかけです。新今宮駅周辺は地下鉄やJR、南海電鉄などを含めて7つの路線が走り、閑空に直結した非常に便利なところですが、過去のイメージがディープなため、過小評価されていました。この20~30年世界の都市を見ていると、オーストラリア・シドニーのダーリングハーバーのように、再開発される場所の方が将来的に発展してきました。それは新今宮エリアも同様で、ポテンシャルが高い、客観的に見てとても魅力的な場所だったのです。

——新しいエリアに進出される時に大切にされていることは何ですか?

地域の文化を感じられる場所があることが非常に大事だと思います。今、都市の駅前にはナショナルチェーンの店が並び、どこも同じ風景になっています。駅前は家賃が高く、地元の人たちが進出しづらいからなのですが、少し駅から離れると、その土地らしさを感じられる場所があります。ターミナル駅ではないけれど、大塚には行列のできるおにぎり専門店がありますし、旭川は駅から少し行くと有名なラーメン店がたくさんあります。つまり、都市の魅力は便利な駅前ではなく、そこから少し離れたところにあるのです。私たちはそうした場所に進出し、その情報を発信することが役割だと考えています。OMO7大阪は全436室で、満室になるとこのエリアの人口が1,000人近く増えます。その人たちのニーズにより、地元に消費が起る。エリアに根付く文化がある場所だからこそ泊まっただけるし、泊まっただければ地域に経済効果が生まれます。そして、地域固有の風景を残せる関係がつくられるのです。

みやぐりん中央を見る。奥にJR新今宮駅。

——都市と観光客を繋ぐことがOMOの役割なのですね。

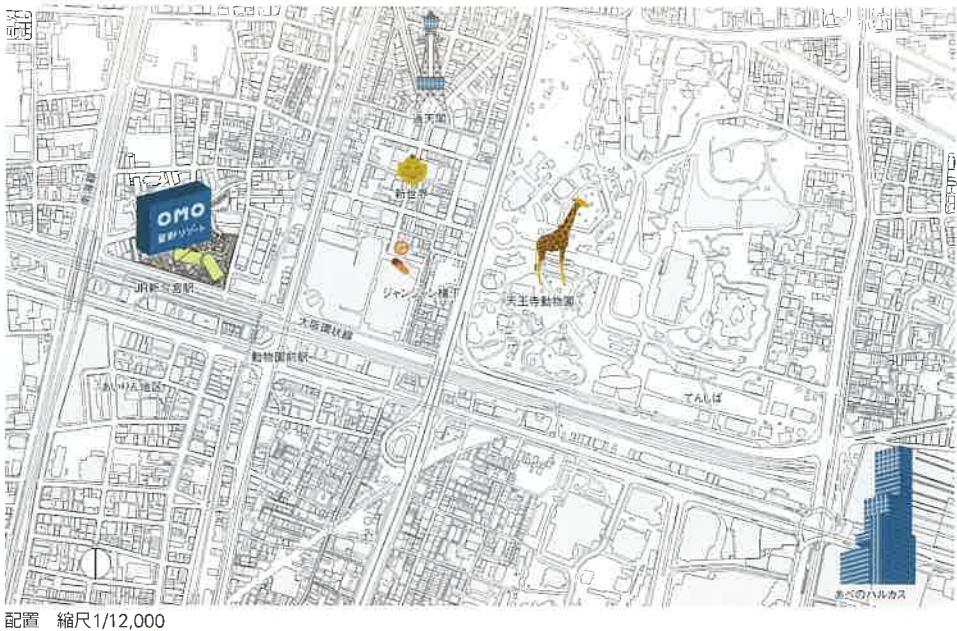
そうですね。リゾートホテルは自然の中にあることが多い、カフェもレストランも自分たちでつくる必要があります。しかし都市というのは、いろんなことをやっている人たちがいるところです。OMO7大阪も周辺と連携して、PIKAPIKA NIGHT(みやぐりんで開かれる宿泊者限定イベント)には地元の方に出店してもらっています。ホテルにとって、周りの500歩圏内が大事なのです。その場所の価値を上げられると、部屋にいる時に、ふとした思いつきで出かけられる、徒歩5分くらいの距離にその土地らしいお店があり、それを楽しむ街歩きを可能にすることが私たちの仕事です。リゾートホテルに泊まっても、わざわざ夕食のためにタクシーや電車には乗ませんよね。それ

と同じで、歩いていける範囲で食事をとったり、その都市の楽しさを発見できると、どんな都市も観光地になり得るのです。

——開業して約2カ月が経ちますが、どのような印象をお持ちですか?

予想以上に関西圏の方に多く宿泊いただいている。新今宮駅に降りたことがないとか、通天閣に行つたことがないとか、近くにいながら気付かなかった都市の側面を発見するマイクロツーリズム的な視点で選ばれているのでしょうか。この先、2025年の大阪・関西万博に向かって、大阪、ひいては日本全体の観光は本当の意味でのアフターコロナに進んでいくのだろうと思います。OMO7大阪は、その時にも都市の魅力を伝えていきたいですね。

(2022年6月16日、オンラインにて 文責:本誌編集部)



都市ホテルから都市再生へ

当敷地は、敷地北側道路の軸線上に通天閣、敷地南側道路の軸線上にあべのハルカスが位置する。大阪を象徴する都市景観への眺望に配慮するため、通天閣への軸線上に高層棟を配し、あべのハルカスに向けて「みやぐりん」と名付けた緑化広場を設けた。今宮戎神社、天王寺公園、てんしば等、既存のグリーンスポットと緑のネットワークを形成することにより、生物多様性に配慮した都市創生としてエリアの価値向上に貢献している。

星野リゾートが「OMO」というブランドに込めた「寝るだけでは終わらせない、旅のテンションを上げる都市ホテル」という思いを、各設計者の専門的知見と統合しながらデザインが進められた。特に、2階のパブリックエリアは各設計者のデザインフィロソフィが交わり、溶け合う空間として結実した。

新今宮駅前に広がる「みやぐりん」は道路レベルから緩やかに2階へと繋がり、ホテルとまちの境界を

曇昧にしている。駅プラットフォームと同じレベルの2階に設けた、ホテルのパブリックエリアである「OMOベース」は広場に対して開かれ、内外を一体利用でき、駅に開かれた場でもある。駅プラットフォームとレベルを合わせることで、駅利用者と宿泊客のアクティビティをインタラクティブに結ぶ。客室をつつみ込む外装膜は、日中は「みやぐりん」の緑を引き立てる背景として、夜間は特殊照明を映し出すスクリーンとして機能し、宿泊客だけでなく、この土地を訪れるすべての人びとに「おもしろい」景観を提供している。熱容量の大きなコンクリートを熱容量の小さな膜材でつつみ込むことで遮熱し、日射負荷を低減する環境配慮型のファサードとしても機能する。

大きな帆船のようにも見えるこのホテルが新今宮の新たな船出を迎えていた。これからのまちの未来をゆっくり見守りたい。（松尾和生／日本設計）

ふたつの谷で見合う「みやぐりん」

2階レベルに広がる「みやぐりん」は都市ホテルの広場として、どこまで周辺に開くかが大きなテーマであった。存在としては都市の大きな緑地としてエリアの価値向上に貢献しつつ、街への開き方は排他的に見えないように工夫し、出入口の集約、段差などを使った往来の制限など、物理的な出入りはフレキシブルにコントロールできるように考えたデザインとしている。空間構造としては、接地レベルから2階ラウンジに続く立体的な広場形態であることからふたつの谷というコンセプトを導いた。道路の谷を介して駅のホームと広場は同じレベルで互いに繋がり、互いに見合う関係になっている。また、メインの広場は中央を芝生の谷として凹ませ、その周りに観客席のように見下ろせるさまざまな居場所のステップを配置した。

（長谷川浩己／オンサイト計画設計事務所）

内外を繋ぐ大庇は、鉄板を折り紙のように曲げて剛性を確保することで、4m以上の軒の出を確保した。
低層部の外壁タイル、大庇のアルミパネル、アルミキャスト天井は日本の伝統文様である麻の葉文様をモチーフとし、宿泊客を楽しませる。





みやぐりんに建つ温浴施設の「湯屋」。
上：天窓より風や光を取り込む。
下：銭湯をモチーフに、憩いの場を合わせて計画。



「OMOベース」は、街歩きの一休みや、旅のリサーチのためのパブリックスペースとして使用される。

上：レストラン「OMOダイニング」。

中：「OMOカフェ & バー」。

下：「ライブラリーラウンジ・ショップ」

「OMOベース」。天井の高さや家具、照明によって居場所のバリエーションをつくれている。



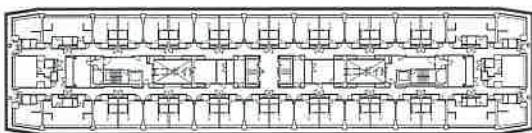
ラウンジ越しにみやぐりんを見る。



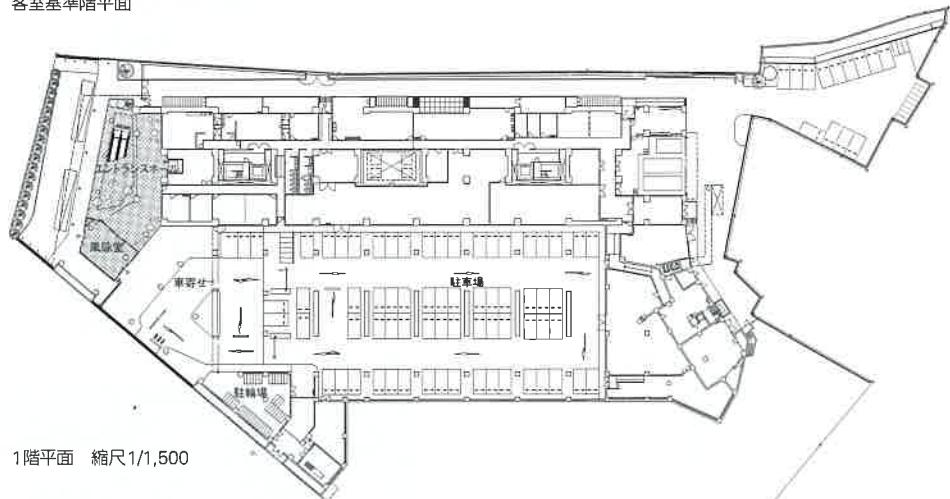
上：エスカレータを上がった先の「OMOゲート」。
下：1階エントランスホール。



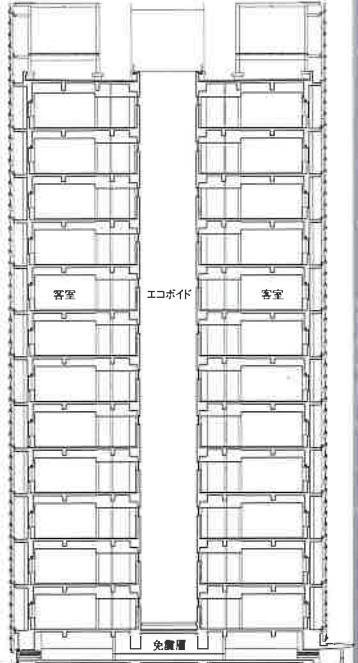
2階平面 縮尺1/1,000



客室基準階平面



1階平面 縮尺1/1,500



JR新今宮駅



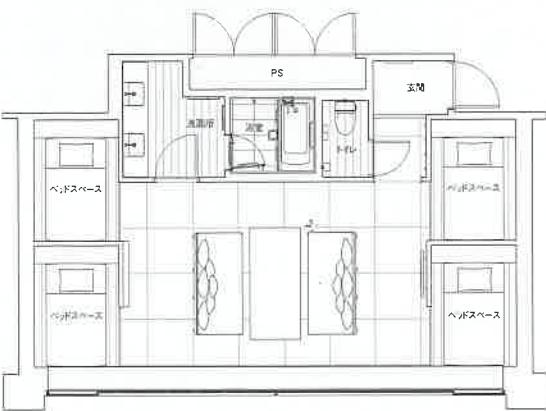
断面 縮尺1/600



いどばたスイート内観。中央に地図上に大阪の観光スポットを描いた「OSAKAボード」を設置。



コーナースイート内観。



いどばたスイート平面 縮尺1/150



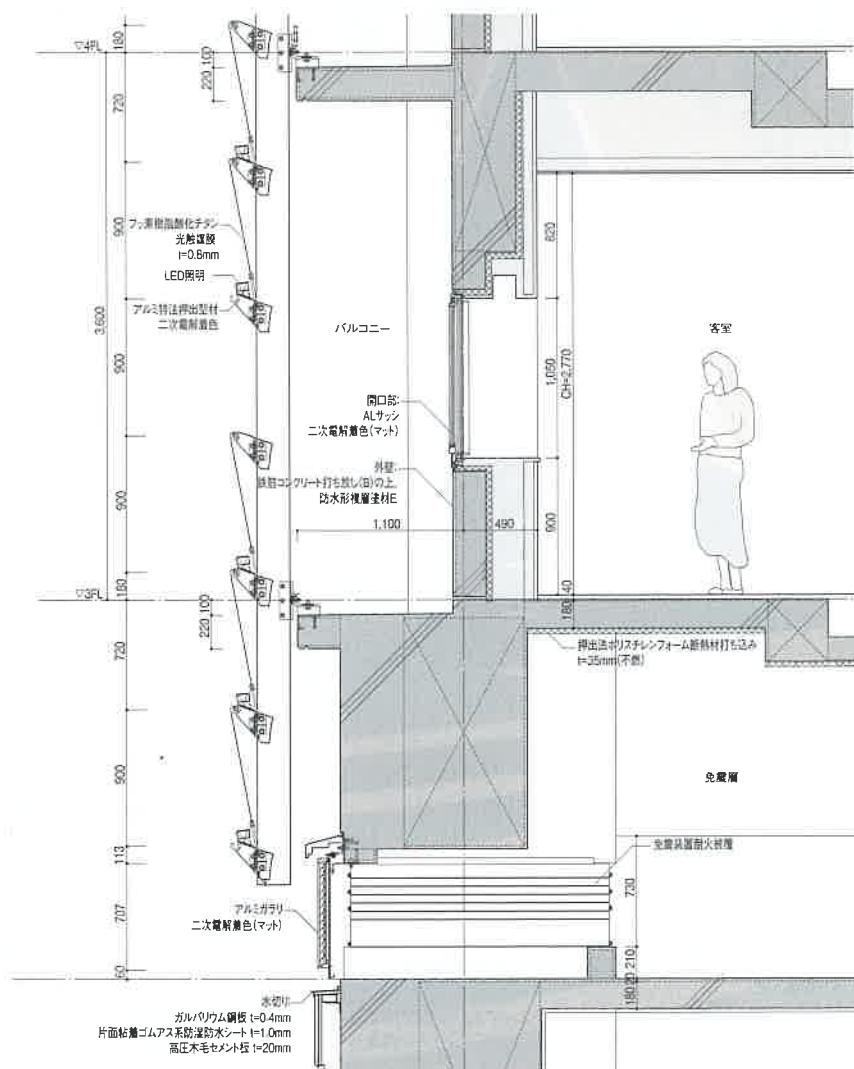
コーナースイート平面 縮尺1/150

居場所のバリエーションをつくる

今回は眠る場所を提供するだけではなく、旅の楽しさを持續させるホテルというブランドのテーマに沿って空間を考えた。2階のホテルパブリックエリアは大きなひとつの空間で、天井の高さや家具、照明によって居場所のバリエーションをつくっている。この空間がみやぐりんや別棟の湯屋といった内外の空間を繋げている。

客室には、ベンチソファなど旅を楽しむための居場所をつくり、またベッドも2段ベッドや納戸型などいろいろな方を提案している。特に「いどばたスイート」は、複数のプライバシーをつくり出す4カ所のベッドコーナーと大人数が利用できる大テーブルで構成した。漫画喫茶が宿泊場所になり得るこの時代、他人との距離感が変わってきた中でこのタイプを考えた。

(東利恵／東環境・建築研究所)



外装膜断面詳細 縮尺1/50

上：外装膜のLEDを使用した照明演出。

下：外装膜にはランダムにパターンを配置した。古代は海であったといふこの土地の記憶を「帆船」のモチーフに重ね合わせた。細かいエレメントをランダムに集積させることで、高層棟をひとつつのボリュームとして見せながら、分節化し景観に配慮している。

